

英国大学修士課程での一年間の学びを終えて

段松冴恵子 (教学部言語教育企画課)

筆者は、2012年度アドミニストレーター養成プログラム受講を経て、2013年8月から2014年9月までの約一年間、海外研修として英国シェフィールド大学大学院に留学し、修士課程(MA in Globalising Education: Policy and Practice)を修了した。研修の終了にあたり、研修の目的及び留学生活の概要、また研修全体を通した学び、特に、正課での学修内容や英国大学(大学院)で行われている様々な取組みや仕組み、また正課での学修や修士論文執筆を通して得た教育政策へ対峙する姿勢についての気づきなどについてここに報告する。

I. 研修目的

筆者は、2012年度アドミニストレーター養成プログラムにおいて、「オン・キャンパスにおける国内学生と留学生との『協働』を通じた学び合いの仕組みの構築」をテーマに研究を行った。その背景には、国際化政策の中での学生の学びの到達度と課題や国内学生・留学生両者からの互いの交流へのニーズ、多様な環境下での「協働」の持つ大なる成長の可能性などに対する問題意識及び関心があった。研究を通じて、両者の「交流」や「協働」を目的とした企画の検討実施及び組織の運営段階から「協働」する仕組みを持つ学生組織の正課外での立ち上げを提案した。本仕組みは、既に生まれている活動の後押し、既存の組織とのコラボレーション(パディ・サークル部活動・各学生スタッフ組織等)を最も重要な柱としていた。一方で、残された課題も多く、正課での展開や学生の多文化環境下での成長についての深い理解などについて、引き続き研究する必要性を痛感していた。

そうした中で、当課題への問題意識及び関心を引き続き持ちつつ、一年間の海外研修において、以下の項目を目的として掲げた。

①グローバル化が教育そのものに与えている影響を考

察しながら、グローバルな社会で活躍するために必要な力(特に異文化・多様性の理解及び多文化環境下におけるコミュニケーション・リーダーシップの発揮などに着目して)と、それらを学生たちが獲得できるような本学でのプログラム提供のあり方を、学生たちのその後のキャリア形成にも着目して研究を行う。

②①についての研究を進める中で、「日本人学生の内向き思考」について、その実態とその本質的な要因を英国国内学生のモビリティについての調査や英国留学中の日本人学生に対する調査などを通して検証する。

③世界各国より留学生が集まる英国大学大学院という多文化環境下に身を置きながら、グローバルな見地を有し広い視野を持って政策を立案することができる、そして学生の人材育成に能動的に関わることができる職員としての意識と力量の向上を図る。

II. 研修概要

1. 研修先

研修先として、本学とも協定を締結しており交換留学も行っているThe University of Sheffield(シェフィールド大学大学院)の修士課程、MA in Globalising Education: Policy and Practice(The School of Education)を選んだ。

シェフィールド大学は、1905年に認可を受けた国立大学である。前身は19世紀に設立されたシェフィールド医学校をはじめとした三つの教育機関であり、1897年にその三校がシェフィールド・ユニバーシティ・カレッジとして合併したものである。人文科学、工学、医学、科学、社会科学を中心に49の学部、82の教育機関を抱え、イギリスのトップ24大学から成るRussel Groupに属し

ている。政府による最新の大学教育評価では、29の学科が「優」と評価され、11の学部が最高点である24ポイントを獲得している。また、29の学部が英国の研究機関トップ10に入っており政府から各専門分野で多額の研究費を獲得するなど、イギリスを代表する教育・研究機関の一つとして国際的に高い評価を受けている。最新の世界ランキングでは、The QS World University Ranking 2014/2015: 69位、Times Higher Education University Ranking 2014/2015: 121位となっている。

1963年に設立された日本研究センターは、英国を代表するアジア研究所として国際的に高い評価を受けている。日本の大学とも活発な交流を行っており、日英学生の交換留学をはじめ日本の研究機関との共同研究など、教育から研究まで日本との綿密な連携に力を注いでいる。

在籍学生数は、125カ国からの留学生を含め、約25,600人であり、うち国内学生 (Home/EU Students) が約19,000名に対して留学生 (Non EU & International Students) が約6,600名にのぼる。特に大学院生については国内学生、留学生の両者がほぼ同数であるなど、留学生率が非常に高くなっている。親しくなった留学生の出身国だけでもその多様性は一目瞭然である (フランス・スペイン・ギリシャ・キプロス・アメリカ・カナダ・メキシコ・オーストラリア・中国・香港・マカオ・韓国・インド・パキスタン・カザフスタン・アゼルバイジャン・イラク・オマーン・リビア など)。

各国からの積極的な留学についても目の当たりにした。まず目立ったのがカザフスタン政府による積極的な奨学金政策である。支援対象はここ数年で学部生から大学院生へシフトしているそうだが、数千人レベルで英米などへ派遣しているという。当該枠組みで留学した学生は、帰国後5年間は公的な機関で働くことが義務付けられているそうである。カザフスタンは移民にも非常に寛容で、特に非常に多くの韓国人が暮らしているということなども知り、これまで知らなかったアジア内でのモビリティについて、見地を広げることもできた。また、シェフィールドには学生・地元住民双方においてイスラム諸国出身者が多く、女性の留学生の活躍も目立つと感じた。妻が夫あるいは家族を連れて渡英してきている事例も少なくなかった。インドからの留学生も目立った。インド国内には50種類以上の言語があるため、異なる地域出身者間では英語でコミュニケーションを取るといこと

や、英語でないと高等教育にアクセスできないということから英語で学ぶ上でのアドバンテージを感じたが、一方で、インド人の友人から、母国語で高等教育にアクセスできる日本は素晴らしいという発言があり、新たな視点をもたらったと感じた。

そうした中で、やはり圧倒的な数を誇っていたのが中国人留学生である。その数は4,000人超であり、留学生全数の実に3分の2近くを占めていることになるが、修士課程だけを見るとより比率は高い。彼らは現地でマジョリティとも言えるコミュニティを形成しており、その強固なネットワークのもと様々な情報を有している。こうした現状を目の当たりにすることで、改めて中国の勢いと人の多さによるパワーを感じた。また同時に中国の社会の実態を知る機会ともなった。学問への思いや明確な目的意識、「留学」という環境ならではの学びを求めている学生ももちろんいるが、多くの学生は就職のために「修士学位」を必要としており、国内でのトップ校への進学競争が極めて熾烈であることもあり、海外の大学世界ランキング上位校への進学が、特別なことではなく多くの学生の中で自然な選択肢となっているとしばしば聞いた。それだけでなく、彼らの大学入学時の学部選択が両親によるものである場合も多いなど、将来子供に安定した生活を送らせるため全力で取り組んでいる状況であるということを感じた。そうした実態を知ることで、今一度「留学」の目的の多様性や「留学とは何か」といった根本的な課題に向き合う機会を得ることができた。

2. 研修スケジュール及び活動内容

(1) 一般英語コースでの準備と生活基盤の整備

大学院正規課程の開始に先んじて、8月19日から9月6日までの3週間、シェフィールド大学の附属機関である English Language Teaching Center (ELTC) が開講している一般英語コース、International Summer School 2013, STUDY English PLUS Options (SEPO) を受講した。ELTCでは、様々な種類のサマープログラムが運営されているが、英語コースに関わっては大きく分けて二種類のコースが提供されていた。筆者の受講したSEPOと、主に大学院からの conditional offer (条件付合格) 保持者用の Pre-sessional コースである。ELTCの他の機能については後に詳述する。このコースには、日本の各協定校から短期留学プログラムという位置づけで非常に多く

の日本人大学生が派遣されてきており、筆者と同クールで東京大学からのグループも受講に来ていた。

スケジュールとしては、月・火・木は9:00から15:15の午前2コマと午後1コマ、水・金は9:00-12:30の午前2コマの後、様々なスポーツやConversation Clubなどといった英語活用実践アクティビティーなどに参加した。授業内容は、午前中はテキストやオンラインのマテリアルなどを用いて、Writing、Reading、Listening、Speakingの4技能の上達を目指すというものだった。クラスには今後大学院進学を目指す留学生も含まれていたため、IELTSの模擬試験形式の実践授業なども行われた。午後はEnglish Business / Management、Social English and Pronunciation、Background to Britainなど5つのOptionsより1つ選択する形式であり、筆者はGrammar and Vocabulary Consolidationを選択した。自身にとっては特に午後の授業が有意義であった。現在、当初より最も苦手であるリスニングに加えて、著しい語彙不足を痛感しているところであったため、単にあらゆる表現を学んだだけでなく、応用性のある接頭辞・接尾辞なども幅広く学び、授業内でも新たな表現を使うトレーニングを徹底的にできたのが有意義であった。

英語コース終了後、語彙の整理やSEPOで用いられていたEdomodoというポータルサイトにあげられているマテリアルを利用しながらAcademic Englishの勉強などをして、正課の開始に備えた。またその間、正課用の寮への引越し、口座開設、学費支払、現地携帯電話手続き、生活必需品の準備など、生活基盤の整備を行った。滞在先としては大学の寮を選んだ。バス・トイレ付きの個室が割り当てられ、キッチンのみを6人でシェアするフラットに居住した。フラットメイトは全員大学院生であり、イギリス人、アメリカ人、フランス人、インド人、中国人、日本人（筆者）と多様なメンバーで構成されており、非常に恵まれた環境であった。大学の中心的建物が集まるエリアにあり、大学のメイン図書館（Information Commons）へも徒歩5分以内、市の中心部も徒歩圏内という利便性のよい大学院生が多く住む寮であった。他に、Endcliffe Village（約3,600名収容、学部生中心、イベント多数、コミュニティ形成、筆者もSEPO受講中滞在）やRanmoor Village（約1,100名収容、大学院生中心、家族用部屋有）といった大きな敷地を有する、閑静な住宅街にある寮などもあった。

（2）正課（大学院修士課程）

9月中旬からの全学オリエンテーションと下旬の研究科毎のガイダンスを経て、正規課程が開始した。私の選択したコースは、4つのモジュール（Module、「科目」に近い単位だが1回毎の授業のテーマが明確であり、カリキュラムポリシーに沿って組み立てられている）と修士論文執筆により構成されていた。私の所属していた教育学研究科では5つの修士のコースがあり、教育学研究科全体の学生数は約90名、うち70%近くが中国人という、やや偏った比率であった。スタンダードなMA in Educationを選択している学生が最も多く、私の選択したMA in Globalising Education所属の学生は6名だったが、モジュール1と4は全学生が同一授業を履修、2と3にてコース毎に分かれていく形となっており、MA in Educationの学生はモジュール毎に受講したいものを選択するため、実際はモジュール2、3とも十数名の受講生と共に学んだ。

モジュール1では‘Critical Issues in Education and Educational Research Philosophy in Education’がテーマとされていた。‘Thinking Education Philosophically’、‘Studying Education: Disciplines of Education, Multidisciplinary and Interdisciplinary Approaches’などといった、教育とは何かといった根本的な課題と、「教育」という学問分野に取り組むにあたってのアプローチの方法に焦点が当てられ、教育をあらゆる角度から捉え、研究の素地を作る時期として位置づけられていた。ルソー、アリストテレスといった哲学の思想と教育との関係からはじまり、「教育」という学問のdisciplineのあり方、「教育」を研究する上での倫理観などを学んだ。これまで向き合う機会を持てていなかった根本的な課題であると同時に、これまで感じてきた自分なりの問題意識をよりクリアにできる機会にもなり、興味深く取り組んだ。

モジュール2からは、以下の通りコース毎に分かれて授業が提供された。2A: Globalisation and Education、2C: Developmental Psychology、2D: Understanding Communities、2E: Early Childhood: Development, Learning and Curriculum（2Bは閉講）の4種類である。私の所属コースでは2Aが必修であったが、非常に興味深いトピックであったため2Dのレクチャーも何度か聴講した。2A: Globalisation and Educationでは、グローバル化が教育に及ぼしている影響や、グローバル化と関連の深いイデオロギーや理論を学んだ。具体的には、

‘Constructivist Pedagogies and Globalisation’、‘Ways of Thinking about Globalisation’、‘Neoliberalism, Education and Governance’、‘Education and the “Knowledge-based economy”’、‘Postcolonial theory, education and globalisation’、などの講義が展開された。これまで表面的であった知識を深めることができ、また断片的であった知識が繋がり、新たな知識や考え方の獲得に至ることができた。

驚いたことに、このモジュール2の期間中に二度も教員ストライキがあった。ストライキへの参加は教員の自由であるため二度目の際は休講にはならなかったが、一度目は最も聞きたかった‘Ways of Thinking about Globalisation’の回が閉講となつてしまい、補講も設定されなかった(休講になった場合も補講はないと事前に事務局より通知があった)。後日、MOLEというオンラインシステムにアップされた資料を参照したり質問をしたりするなどして一定自分なりに補ったが、短期間に二度もストライキがあったことには驚いた。街では教員たちによる行進なども行われていたようである。

モジュール3では、カリキュラムやアセスメントがどのようにグローバル化の影響を受けてきているかということがテーマであった。ここでのキーワードは‘vernacularisation’(「地域化」)であった。例えばOECDや世界銀行、EUなどの‘supra-national institutions’での決定は、そのままでは各地域では機能しない可能性があり、各地域の教育制度や文化、伝統などを十分理解して、それらに合う形にしなければ馴染まない。また、ある地域で円滑に機能している仕組みが、そのままの地域でも当てはまるということはない。そうした文脈において、グローバル化が進む中で、教育制度や方針、成果を測る指標がどうあるべきかということが議論の渦中にあり、また議論していかなければならない事項であるということが強調されていた。具体的に英国で使用されている教科書をもとに、欠落している視点や背後に隠れている価値観などを明らかにするという作業なども行った。

特にモジュール2と3はコース毎に分かれていたため、関心に近い事項を学ぶことができた。モジュール2の成果物としては、「student mobilityを促進することによる、個人の力量形成以外のアドバンテージについて論じる」という課題に基づきエッセイを書き、新たな観点を得た。それは、一定のエリア(例えば‘European Higher

Education Area’)内でのモビリティの促進が、その地域内での学生(若者)のアイデンティティ、帰属意識の醸成に大きく寄与し、その結果そのエリア全体の社会や経済の発展につながるという考え方である。それを、CAMPUS ASIAの試みと東アジア共同体構想との関係についての考察へと繋げた。また、モジュール3では、特定の国のいずれかの教育課程に関わる政策・方針についてテーマを設定して論じるという課題を出されたことから、日本の高等教育に焦点を当て、大学設置基準大綱化当時の設置基準の改正に見られる、教養教育の発展という政策立案者の意図と、改革後の結果(各大学の動き)の間に乖離が生まれた過程と理由を、複数の理論を用いて説明するということを試みた。

モジュール4は卒業論文執筆準備のための授業で構成されていた。2月中旬に修士論文の概要を提出し、それに合わせて4月に指導教員が決定されるという流れであった。修士論文については後述する。

上述した各モジュールにおける課題や修士論文に取り組むにあたって、一見留学の総括としては矛盾しているように見えるかもしれないが、これまででもっとも日本の高等教育政策と向き合ったといえる。海外留学という環境の特異性はもちろんのこと、社会人でありながら一年間学びに没頭できるというのはかけがえのない機会であり、これまで断片的であった知識や(高等)教育及びそれを取り巻く状況についての理解を一度トータルに見ることができたという点でも、非常に有意義であった。

それらのモジュール以外に、10人程度ずつのグループに分かれ、2名の担当チューターのもと、当該週の講義内容に関わるディスカッションやライティングアサインメントに関わる細かいフォローが行われるチュートリアル時間があつた。また、サポートプログラムという、学部・研究科毎にカスタマイズされた留学生対象の英語サポートの授業も組み込まれていた。一年の前半はプレゼンテーションに必要なスキルやライティングアサインメントの書き方など、後半は、修士論文執筆のための様々な調査・統計の手法や研究倫理などが主なテーマとなっていた。加えて、その他英語で外国語を学ぶ経験、英国においてどういった層が外国語を学んでいるかといった関心から、前期にスペイン語の授業も履修した。カリキュラムには組み込まれていないが2万5千円ほどで正課の授業を履修することができた。入門の授業であったが、印象としては非常に体系だったカリキュラムであり、進

度も非常に速く、どんどん使い聞き話させるといった授業スタイルであった。レクチャーと、Lab Hour という PC を使って当該週に習った単元の総復習・反復練習をする時間が別曜日に置かれ、それら週2回の授業で1セットとなっていた。卒業要件に含まれている学部の学生だけでなく、オプションで選択できる学部の学生や博士課程の学生、正規留学生など、様々な層の学生が受講していた。

（3）正課外での活動

授業以外の部分でも、自身の研究分野に関わるもの、あるいは興味深いイベントやネットワーキングに役立ちそうなものに積極的に参加をした。例えば、Public Engagement に関わるセミナーに幾度か参加した。Public Engagement とは、英国の高等教育政策のなかで、大学と社会の間での相互関与を表すために使われている表現であり、対象である“Public”には入学希望者、一般大衆、市民団体、公共団体、政府、産業界など様々なステークホルダーを含み、非常に幅広い。大学の教職員がイベント、セミナーなどの行事を通して社会とつながり、それぞれの価値を共有することで、関係者間で知識、専門性、技術が共有され、相互利益が生まれる。そして、その過程において、信頼、理解、コラボレーションが築かれ、市民社会における高等教育の役割の強化や、影響力の向上、また大学と社会が共存共栄できる仕組みを構築することにつながる、として様々な取り組みが行われている（British Council, 2013; Tanaka, 2014）。そこでは日本や立命館にも非常に造詣の深い外国人教員とも出会うことができ、イギリスの高等教育の現状（特に大学や教員評価システム）など、日本や教員の出身国の実情と合わせてディスカッションをする機会を頂けたりといったことにも繋げることができた。また2日間にわたって、複数大学の、大学院生が合同で自らの研究分野の発表をする Research Student Conference や数々のシンポジウム、Student Skills Development の一環である Mind mapping 講座など、様々な種類の機会・イベントに参加した。

Ⅲ. 研修を通じての気づき・シェフィールド大学における取組み

1. 教育の質の維持・向上及び学びの可視化

本学（日本の大学）とのカリキュラム設計上の大きな違いは、モジュールという単位での運用だろう。多くの授業から選択する、という形式ではなく、体系だっている（とされる）科目あるいは講義が一定パッケージとなっており、そのモジュールを一定の選択肢の中から選ぶという形となっている。

授業概要や必要な資料は全て MOLE というオンラインシステムを通して学生に提供されていた。全ての授業回に同じフォーマットによるコースレジメが整備されており、もちろん個人で興味関心を拡大していくという大前提がある上で、Pre-session reading, Further reading のリストが全て最初に示される。ライティングアサインメントの提出も専用のカバーシートを使って全て MOLE を通じて行う形がとられていた。評価は毎回、事前に公開されている Marking Criteria である 100 point scale に基づいて行われていた。また、そうした課題やプレゼンテーションの詳細なフィードバックは、担当チューターよりスコアと共に各学生にメールにて送られてきた。

ライティングアサインメントに取り組むにあたって、plagiarism（盗用）に対する解説に非常に時間が割かれたことが印象的であった。確かに、当然のこととして plagiarism が許されないことだということを理解していたとしても、パラフレーズする力やどの程度までは許容されるのかという基準の理解、引用のルール of 厳格な遵守ということがなかなか浸透し切っていないという現状を表しているのだろうと感じた。現に英語を母国語としない学生にとって、一つの考えや事象を“自分の言葉”を使ってあらゆる表現で言い換え要約し、異なる文の組み立てを用いて述べ表すのは難しく、深い理解と高い能力が必要だということを実感した。

多くの学部生が卒業論文のために統計調査を伴う研究を実施していたことも印象的であった。毎日のように彼らの研究への協力依頼がメールで配信されてきており、私も実際に、非常に関心の近いテーマを扱っていた学部生の卒業論文のためのインタビュー協力も行った（テーマ：The influence of the spaces within the university environment influencing integration and segregation of international students. In particular, the influence of

lecture theatres and university accommodation on friendship formations of students)。

さらに、Higher Education Achievement Report (HEAR) という、大学における全ての課外活動の成果を評価するツールを有していた。これは、企業にも広く認知され、就職活動に非常に活かされているという。また、アカデミック・スキルやゼネラル・スキルそれぞれに関わる証明書 (certificate) を発行するなど、学びの可視化についての取組みに積極的であることを痛感した。特に後者のゼネラル・スキルに関わる certificate は The Sheffield Graduate Award といい、Enterprise/ Volunteering* / Student Jobs and Work Experience* / Cultural and Social / Internationalisation / The University and its Community に区分された、150 以上にのぼる活動に一定時間数従事することで授与される (* は必須)。また、前者のアカデミック・スキルに関する certificate も用意されているという点からは、教養教育の考え方の違い、すなわち日本では正課の枠組みの中で醸成していくものとして整理されているのに対して、英国では正課外で訓練されるものと明確に区別されているという違いを、改めて読み取ることができる。

2. 学びのコミュニティの形成

ラーニング・コモンズの設置が多くの大学でテーマとなっており、「学びのコミュニティ」の形成は本学においても重要課題の一つとなっている。シェフィールド大学では、まさに「学びのコミュニティ」があらゆるところで生まれていた。その中心となっていたのが、24 時間開館の 6 階建て、約 1,100 人収容のメイン図書館、Information Commons (IC) である。そこでは、熱心に学ぶ多くの学生の姿と「学びのコミュニティ」があふれている状況を常に目にした。日中は常時 1,000 名以上の学生、24 時を超えても数百の学生が IC にて勉強している。この図書館の一番の特徴は、各々の“ニーズ”によって幅広く選べる様々な種類のスペースがあるということである。開架スペースにあるグループ学習が可能なテーブルやソファが集まるエリアや様々なタイプの個人学習エリア、そしてサイレントルーム (こども、吹き抜けの開放的な空間でもあるサイレントルームと、最上階にあるより重厚な雰囲気サイレントスペースなどに分かれている) などである。開架スペースは、個々の学習はもちろん、グループで議論をしたり共に課題に取り組んだ

り、あるいは勉強を教え合ったりしている学生でひしめいていた。15 ほどある、Web で予約が可能なグループ学習室も常に利用されていた。大学も IC をこう紹介している — “It combines a variety of different study environments in one light, airy and spacious building.”。

そして、図書館だけでなく、生協のようなショップやカフェ、レストラン、バー、映画上映も行われるシアターなどが入り学生サービスに関わるオフィスとも直結している Students' Union という建物内にも、“学生の居場所”が多く確保されており、多くの学生が個々の勉強や読書、そしてグループ学習に勤しんでいた。

物理的なスペースの存在以外に、何がこういった環境の形成を促進しているのか。筆者は、「正課との“連携”もしくは“接続”と、「学生の“居場所”及び“心の拠り所”としての空間創出」の二つがキーワードだと感じた。自明のことではあるかもしれないが、まず共に学習する必要のある課題が課されているということが、直接的に「学びのコミュニティ」形成につながっているのである。そして、それだけでなく、負荷の大きい課題が課されることにより、皆が自然に IC などに集まり、そこで励まし合いながら共に課題に臨むことにより、ある種の連帯感のようなものも生まれているのではないかと感じた。また、シェフィールド大学は、一つの敷地内に施設が集まるキャンパス型ではなく街の中に広く施設が点在するシティ型の大学ではあるが、主要な建物は大方固まって建っており、その中心に IC と Students' Union が位置している。つまり、居場所となり得る施設が中心に存在し、全体としてコミュニティの形成がより機能しやすい造りとなっていると考えられる。さらに、やはり近隣にある巨大な寮群の存在が大きい。しばしば言及される、寮によるコミュニティの形成という観点だけでなく、寮が近いことで時間の制約なく大学に滞在することができ、大学周辺で、生活 (居住)・学び・遊びが全て完結することで、キャンパス全体においてコミュニティが発生しやすくなっていると考えられる。

3. 学生自主活動と学生支援

(1) 学生自主活動と学生の大学運営への参加

シェフィールド大学では、学生自主活動が非常に活発である印象を受けた。Society と Committee とを合わせて 300 以上が活動している。Society とは日本の大学というサークルのような集団、Committee とは Society を

運営する立場の学生の集まりや、Black and Minority Ethnic Students' Committee, Course Rep Committee, Volunteering Committee, International Students' Committee などのように、一定のグループを代表するような集まりである。こうした Committee が全学向けのイベントを企画することもある（後に詳述）。

また、Education officer や International Officer, Women's Officer など8名の Student's Union Officers が、全学的な選挙戦を通して選出されるなど非常に興味深かった。彼らが、掲げた公約をどのように大学側（教職員）と協働して具体化していくのかといったプロセスを見ることができなかったのは残念であった。これ以外にも頻繁に、大学教育の改善を提案するためのフォーカスグループや意見交換会の案内が届いており、そうした学生の声をもとに大学を良くしていこうというプロセスがどの程度機能しているのかという点が非常に興味深く、今後の調査の可能性を模索中である。

（2）学生支援方針と体制—「学生サービス」という観点

学生支援を進める上での考え方の柱をどう置くかというのは、この間多くの本学職員も直面している重要な課題の一つであろう。具体的には例えばどのようにしたら学生のモチベーションを高め自主的な活動を活性化することができるのか、学生組織を持続可能な組織とすることができるのか、あるいは「教育的観点からの指導」と「サービスの提供」の折り合いについてどう考えるのか、などといった点である。シェフィールド大学は、その点について二つの解答をもって対応しているようであった。それは、「学生生活の充実への注力」と「包括的な学生サービスの実現」である。前者は、Students' Union が英国一の評価、Student Experience Survey でも同様に1位を獲得していること、またそれを非常にアピールしていることからわかる。後者をあらかず具体的な項目としては、以下の三点を挙げたい。一点目は、「目指せ学生支援サービス一次対応世界一（“To be globally recognized as the number one provider of front-line student support services”）」といったビジョン・ステートメントに表された理念である。その具体策として、Student Services Information Desk にてワン・ストップサービスが展開されている。学生は、手続き面などで不明な点があるとまずここに立ち寄り相談をする。職員は非常に丁寧に応答し、迅速に対応、行くべきオフィスの

場所と相談内容などが書かれた紙を打ち出してくれる。直接の管轄業務も、ビザ関連や証明書発行業務、住所変更や学生証交換などにわたる。

二点目は、留学生の支援を担う、English Language Teaching Centre の機能である。ELTC の夏期のコースについては、「II - 2」で述べた通りであるが、学期中正規在学学生に対しても様々なサービスが全て無料で提供されている。主に以下の3つのプログラムから成り、筆者はいずれも利用していた。

- ① English Language Support Classes for International Students Studying at the University
- ② Language Support Classes within Departments
- ③ Writing Advisory Service: One-to-One Tutorial Advice (by appointment)

①については、私は Academic Listening & Speaking と Dissertation Writing を受講したが、他に Academic Reading & Writing や Grammar, Pronunciation などといったクラスも開講されていた。Semester 開始前に一人2クラスを上限として応募する形が取られているが、希望者が多いようで、多数の学生がキャンセル待ちをしている状況であった。②については既に触れたが学部毎の英語サポートとなっており、教育学研究科ではサポートプログラムの最初5回がELTCの教員によるものであった（それ以降は、学部の教授らによる研究倫理や研究手法の講義で構成されていた）。③については完全予約制の個別ライティングサポートとなっており、予約を確保するのが至難の業ではあるが、スーパーバイザーから見てもらうことが難しい英語の詳細な部分を指摘してもらえ、ため非常に有用なサービスであり、筆者もアサインメントが課される度活用していた。これら以外にも以下のようなサービスも提供されていた。

- ④ Online Language Support Materials via MOLE
- ⑤ Dyslexia/SpLD Specialist Tutorial Service
- ⑥ Partners Classes: Free Language Classes for the Partners of International Students

これらにも見られるように、マイノリティの人々へのサポートに対する意識というものも特徴的だと感じた。留学生本人だけでなく、⑥のように留学生の家族にも配慮したサービスが施されており、また⑤にも見られるように、学習障害や身体的な障害を持った学生への配慮も常に行われていた。他の場面でも、例えばシンポジウムの申し込みなどといったどのような応募にも配慮が必要か

どうかを申告する欄があったり、また障害を持った学生たちの society や committee など活動していたりするなど、コミュニティとして尊重されている気風を実感した。

そして、この「包括的な学生サービス」という考え方をもっとも顕著に表していたのが、三点目の Student Service を管轄する部署の設置の仕方である。シェフィールド大学では Student Services Department のもと、① Student Recruitment & Admissions、② Academic & Learning Services、③ Student Support & Wellbeing、④ Student Development、⑤ English Language Teaching Centre の5つの部署が置かれていた。本学の学生部の管轄範囲 (③) の他、本学でいう、入学センター (①)、学生の正課での学びに関わる教学部の一部の機能 (②)、正課外のエクステンションコースの提供 (④) 並びにシェフィールド大学の英語教育を総合的に支える附属機関である ELTC が Student Services Department の傘の下にあるのである。これは、学生の学びに関する事項をあらゆる側面から統一的に包括的にみていこうという試みであると捉えられる。本学では「大きな教学部」という議論があるように「大きな学生部」ともいえるかもしれないが、考え方としては本学が抱えている問題意識にも応えうる一つの可能性ではないだろうか。こうした体制の中で、職員がどのように協働しているのか、あらゆるところに見られる情報の一元化はどのような工夫のもと行えているのか、後に詳述する大規模な新入生オリエンテーションなどはどこが管轄しているのか等ということに関心が向くが、残念ながら今回の留学中にそこまでの調査を組み込むことができなかった。この点についても、今後深めていく方法を検討したい。

学生支援のあり方からは少し離れるが、上記の点と関連して、国際部的機能の考え方についても、シェフィールド大学が取っている体制は示唆に富む。Student Services Department の体制の中でみると、例えば前頁① Student Recruitment & Admissions の中に International Office、Admissions、UK/EU recruitment が含まれている。また、次項目「4.」で示す国内学生と留学生との交流、協働を促進するイベントの企画・実施は、③ Student Support & Wellbeing の中の Student Support and Guidance というチームの中の International Student Support 担当が、Immigration Advice や Visa

Extension Scheme に加えて、Induction and Orientation、Meet and Greet Scheme、Ongoing Support with Transitions and Culture Shock、Social Events and Activities の一環として担当しているようであった。つまり、国際関連事項も、全て業務別に各部課に落とし込まれているのである。また、全学的な体制の中で国際部的機能がどう捉えられているかということは、役職の置かれ方から垣間見ることができた (図1)。それぞれの部署に役員 (Professional Services Executive) が置かれているのだが、Sheffield International Executive が管轄することとなっている Sheffield International の役割については、“a cross-functional role to develop and connect the many international activities of the University” と規定されている。つまり、International Executive は、特定の部署について責任を負っているのではなく、各部課の国際関連事項の動向を横断的に統括しているのである。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ●Accommodation and Commercial Services ●Corporate Affairs ●Corporate Information and Computing Services ●Development, Alumni Relations and Events Office ●Estates and Facilities Management ●Finance and Commercial ●Human Resources ●Research and Innovation Services ●Sheffield International (横断的に情報集積) “a cross-functional role to develop and connect the many international activities of the University” ●Strategy, Planning and Governance ●Student Services ●The University Library |
|--|

図1 Professional Services Executive の配置

(出典: <http://www.sheffield.ac.uk/departments/professional-services/executive>)

4. 国内学生と留学生との交流・協働の促進

国際交流や異文化理解の促進、国内学生と留学生のコミュニティ形成や両者の協働の促進についての見地を広げることは、「I」でも述べたように筆者にとって最も重要な課題の一つであった。実際にシェフィールド大学では、これらに資する取組みも複数準備されていた。一点目に、まず「溶け込み (integration)」の機会の重視が挙げられるだろう。これを最も顕著に体现していたと考えられるのが、大規模及び長期間にわたるオリエンテーションである。これは、全学生を対象にしたものであるが、留学生を含めて、学生たちの大学へのコミットメントの促進や大学全体のコミュニティ形成、結果的に

そこから生まれる学びの意欲の醸成に非常に重要な役割を果たしていた。

具体的には2週にわたって Discovery Week（1週目）と Introduction Week（2週目）が設けられていた。1週目は、より大学全体や地域を知るようなガイダンスやイベント、2週目にはそれらに加えて履修ガイダンスや図書館ガイダンス、メディカルチェック、留学生であれば学生登録など、手続き部分が行われていた。つまり、まず大学のコミュニティを身近に感じる準備期間が設けられているのである。

それとは別に、年間を通じてほぼ毎日、何かしらの全学生向けイベントが走っており、Students' Union のページに集約され一覧表として見ることができ、どのイベントの予約も Students' Union 内の Box Office に加えて Web 上で行うことができた。例えば「Give it a go」というシリーズでは、様々な society による「サークルのお試し」のような形でそれぞれの活動を体験できる機会や、近隣のお店におけるカクテル作りの体験や数10種類のチョコレート試食など地域を身近に感じられるような企画、近隣の国立公園や主要都市へのエクスカッションなどが提供されていた。また、「女性の権利について」、「シェフィールドが国際都市になるために必要なこと」などのトーク・ディスカッションイベントやボランティア企画などもこうした一覧の中に示されており、様々な形で大学、地域、あらゆるコミュニティに触れる機会が常に用意されていた。筆者自身もいくつかの企画に参加した他、周囲の留学生たちも、こうしたオリエンテーションを経て、学部・研究科を超えて多くの友人を作っていた。

また、society が、日本ではどちらかというと活動内容単位で結成されていることの方が多いのに対して、あらゆる文化や民族コミュニティの単位で結成されているものも非常に多く、その文化に興味がある学生とその文化を発信している学生が出会う場の自然な発生につながっていると考えられる。また society の活動には厳しい制約があるわけではないことが多い。例えばダンスの society でも、「メンバーシップ」か否かで1回にかかる料金が異なるだけで、ビジターでもレッスンを受けられるなど、非常にフレキシブルに参加形態を選べる。そのため、1年間しか在籍しない大学院生でも都合の合う時に参加するといったこともしやすく、深く協働して何かを成し遂げるといった経験にまでは繋がらないかもしれない反面、関心さえあればその活動やコミュニティに触

られる機会というのが圧倒的に多いと感じた。

その他、イギリスで感じうる母国との文化のギャップを学ぶセミナーである Cultural Compass（月2回程度）や Cross Cultural Awareness Training, One World Cafe（週に1回）、各 Society がそれぞれの国の料理の店を出店する World Food Festival など、様々な国際交流、異文化理解などを促す企画が開かれていた。

一見潤沢に機会が準備されているように思えるが、しかしこうした取組みは、当課題に非常に高い関心を持つ1、2名の職員の情熱に支えられているということであった。また、こうした場への国内学生（イギリス人学生）の参加度合いは高くなく、やはり留学生の参加が主であった。こうした現状から、国内学生と留学生との交流、協働、学びあいの促進という課題の普遍性を改めて実感した。

学生主催のイベントで非常に興味深かったものもあった。例えば、International Students' Committee 主催の International Language Festival である。これは各国からの留学生が母国語を教えるイベントであり、2日間にわたって実に50種類以上の言語に触れられる機会が準備された。筆者はクロアチア語とアラビア語の講座に参加し、楽しいひと時を過ごすことができた。先生役を担った友人たちも張り切って準備をしており、留学生の大学への帰属意識や主体感、また他の国からの留学生や国内学生たちに様々な国や文化に興味を持ってもらう機会としてとてもよい企画だと感じた。

また、現在当課でも手探りで始めている Tandem（Language Exchange、互いの主要言語と学習言語を教え学び合う仕組み）についても、シェフィールド大学では、欧州間のモビリティの促進を目指すエラスムスプログラムの枠組みで留学に来ている学生を支援する学生団体により主導されていた。年に2回 Semester 毎に、午後いっぱい時間を使って Students' Union 内のスペースで、語学学習パートナーを見つけるための交流会が開かれ、学生は都合のよい時間帯にそのスペースに行き、自由に会話しながらパートナーを探すという仕組みがとられていた。私自身は前期 Semester に2名の学生と Language Exchange を行った。1名はイギリス人の学部学生で、カレッジを卒業した後、東アジアについて学びたいという気持ちからシェフィールド大学に再び入学し直したという学生である。日本語への学びの意識も非常に高く、外部の講座と独学を組み合わせるとかなり高いレ

ベルに到達していたが、非常に控え目な性格であり、お互いにとって有益な時間をという原則のもと、筆者としては英語と日本語の時間を半々にし、彼のニーズを聞き出して本人がもっと伸ばしたいと思っている部分に時間を割こうと考えていたのに対して、日本語を使うことをためらっておりどうしても英語の時間が長くなっていた。今考えると、日本語を使い、その能力を高めることが直接の目的ではなく、学んでいる言語を母国語とする友人とのコミュニケーションの機会自体が彼にとっては貴重だったのかもしれないと感じている。もう1名は、母国のスピーチコンテストで優勝したこともあるという中国人修士課程修了生であった。彼女はシェフィールド大学大学院卒業後、英国で就職活動中であり、筆者の他、フランス人学生とも Language Exchange を経験していた。彼女は Language Exchange を通しての学びの経験も豊富であり、お互いの貴重な時間をしっかり半分ずつ使おうといった、筆者がイメージしていた Language Exchange 像を共有し体現できたパートナーであった。彼女は分厚いテキストで音声教材も用いながら独学で日本語を学んでおり、特に発音や表現の応用などを中心にテキストに沿いながら勉強したいというスタイルであった。私は、プレゼンテーションの練習に付き合ってもらったり、日本と中国の就職活動の違いなどについてディスカッションしたりと、その時々々のニーズに合わせて勉強に付き合ってもらった。

これらの経験を通じて、「お互いに言語を教えあい学びあう」という Language Exchange を体現しようとする、お互いのイメージの相当の合致と高い意識が必要なのだということを当時は実感し、そういった仕組み作りの面でも学んだことは大きかった。一方で、帰国後、学生・職員と意見交換をしていく中で、本当に語学を真剣に学びたいのであれば授業での学びや教員からの学びを重視すればよく、Language Exchange を学びのツールとして選択する理由は、やはりコミュニケーションそのものであり友人関係の拡大であるのではないかということに気づき、これからの制度設計に生かしたいと考えている。

IV. 修士論文概要及び「政策」に対峙する姿勢に関する気づき

1. 修士論文概要

報告事項の最終項目として、簡単に修士論文の概要及びそこから得たものについて触れておきたい。

修士論文では "Economic and Social Perspectives in Policies for Globalisation in Japanese Higher Education" という題目のもと、高等教育の政策分析をテーマとした。世界的に（高等）教育が「経済的文脈」によって語られることが多くなっていることに対する危惧のもと、高等教育は、その根源的な目的と照らし合わせて、「経済的観点」だけでなく「社会的民主的観点」が保持されることが必要という立場から、日本のグローバル化への対応について、あるいはグローバル化に関連する事象を背景として今後の方針について述べられた高等教育政策文書にみられる「経済的・社会的観点」を分析した。

問題意識の根底にあったのは、グローバル化の経済的側面と密接に関わるネオ・リベラリズム（新自由主義）というイデオロギーが、特に欧米の高等教育に及ぼしている影響の大きさである。ネオ・リベラリズムは、もともと自由競争や自由貿易をよしとする経済及び市場論理からきている概念である (Olsen & Peters, 2005)。そして、フランクリン・ルーズベルトがニューディールと呼ばれる政策下で目指した福祉国家の推進の反動として現れてきたイデオロギーである。20世紀前半のアメリカでは、ニューディール政策のもと、銀行や各産業は政府のコントロール下に置かれていたが、そうした中で資本主義発展の礎が築かれ、労働者の権利や公共福祉も拡大した。一方で、ニューディール以前に既得権益を有していた一部のエリート層が政府による経済活動のコントロールに反発し、生まれてきたのがネオ・リベラリズムの潮流である。彼らは、「公共の利益」という考え方に代えて、「自己責任」論を展開した。すなわち、グローバル化が進み生まれた競争的環境の中で、個々人が自ら知識や技術を身につけより良い生活を目指す意欲を持つことが必要だと訴えたのである (Henry, 2001; Hursh & Henderson, 2011; Kleinman et al, 2013)。この考え方は、経済のグローバル化と相まって大いに影響力をもっていく。特に人的資源を最重要資本と考える 'knowledge capitalism' という概念が広く浸透し、またこの概念が主流となっている社会が、答申でもたびたび登場している「知識基盤社会」

表1 The core three components in relation to the aim of higher education under globalisation with economic and social perspectives

	Economic Improvement (Enhancement of Competitiveness)		Social Enrichment	
	Backgrounds	Reactions / Implementation	Backgrounds	Reactions / Implementation
(i) Expansion and Opportunity	Market-oriented	-Producing human capital efficiently -Providing 'consumers' with more choices	Equity based on the concept of fairness (social justice)	-Pursuit for equality -Openness of knowledge
(ii) Training and Skills Formation	Producing human capital	-Vocational & professional education + General Skills	Nurturing the abilities for establishment of the sustainable world	-Focus more on the aspects of humanity
(iii) Quality and Standards		-Quality improvement		-Quality improvement
	Needs for visual measurement and fulfilment of accountability	-Quality assurance		

(出典：Dammatsu, 2014)

である。ネオ・リベラリズムの影響は、次第に「効率性」、「競争力」、「説明責任」の要求という形で高等教育にもあらわれてくることになる。最も大きな影響は、公的資金の配分の減少である。これにより、大学は自ら資金を生み出す必要に迫られ、海外への進出(新しい機関やキャンパスの設立)や留学生の獲得を通じた財源の確保といった昨今のグローバル展開へも繋がっているのである。こうした動きは「商業化」とも評される。

しかし、社会的民主主義的観点から、この行き過ぎた経済的視点の強調に警鐘が鳴らされている。この問題提起は、教育は単に個人に資するものではなく、公共の利益に資するものであるべきであるといった主張や、教育の本来の目的は「効率の良い労働者」を生み出すことではなく、「民主的な市民」を生み出すことであるという主張(Hursh & Henderson, 2011; Rizvi et al, 2005)に裏打ちされている。また、Barnett (2011)は、地球温暖化、エネルギー問題、経済格差問題など様々な世界規模の社会問題に対峙できる人材、つまり「持続可能な社会」に貢献する人材を輩出することが大学の使命だと主張している。

そしてこのネオ・リベラリズムの高等教育への浸透は、日本においても例外ではない。これを特に顕著に表しているのが国公立大学の法人化である。こうした潮流についての危惧は、日本でも示され始めてきている。

そこで今回の研究では、高等教育政策において、「経済的観点」だけではなく、「社会的観点」にも焦点が当てられるような方法について検証するべく、政策分析を試みた。分析の手順としては、まず学術文献調査を経て、

数ある重要な指標から、高等教育の根本的な目的と関わりが深く且つこれまで十分には検証されてきていないとみられる三つの要素、(i) Expansion and Opportunity、(ii) Training and Skills Formation、(iii) Quality and Standardsを抽出し、それらをもとに複数の政策文書を分析した。分析の対象としては、2000年以降のグローバル化政策に関わる4つの文部科学省答申^(注)と、2014年のスーパーグローバル大学採択事業募集要項を選択した。次に、上記の三要素それぞれに経済的観点と社会的観点の両側面があると考えられることを明らかにした(表1)。例えば、高等教育の(i)「規模の拡大と機会(Expansion and Opportunity)」は、経済的観点からみると、市場原理に端を発した「人的資源(human capital)の効率的な創出」と「消費者へのより多くの選択肢の提供」が重要な目的であるのに対し、社会的観点からみると「公平性」という概念に基づいた「平等」の追求あるいは「知識の社会への広い還元」が根源的な動機である、というように、高等教育を拡大していく根拠にも、背景に二つの意図が存在している。(ii)「人材育成や能力形成(Training and Skills Formation)」の目的や意図、つまり人材育成目標や学生に求められる能力についても同様に、両分脈においてそれぞれ規定されているといえる。(iii)「質と基準(Quality and Standards)」については、「教育の質向上(Quality Improvement)」が内発的な動機に裏打ちされた教育の質を向上させるための行動であり経済的・社会的両観点において不可欠なのに対して、「教育の質保証(Quality Assurance)」は、競争環境などに後押しされた定量指標による「教育実績の測定」やそれ

らを教育機関としての資格や学位プログラムの適切性の証明として広く示す行為であるという点で、経済的観点とより関連の深いものとして捉えられる。そして、これらの項目が各政策文書にどの程度、そしてどのように記述されているかを検証した。

いくつかの発見があったが、まず主要な結論としては、どの答申においても、(i)～(iii)のいずれの要素についても一定程度経済的・社会的観点の双方について触れられているということがわかった。中でも2005年の答申においては、経済的観点と社会的観点の両立あるいは融合の必要性についても明記されていた。また、2005年と2008年の答申には「持続可能な社会の実現」が教育の目的と関連して主張されていたことも特筆すべきことであった。

そして、経年的な変化の中にもいくつか興味深い文脈を読み取ったが、特に(iii) Quality and Standardsの項目についてのスタンスの変化が示唆に富んでいた。2005年の答申は「教育の質向上 (Quality improvement)」に焦点を当てていたのに対して2008年の答申は「教育の質保証 (Quality assurance)」という「経済的観点」に大きく論を割き、続く2012年の答申は再度「教育の質向上 (Quality improvement)」に具体的に焦点を当てていくという方向性の転換が見られたのである。そして最終的に、経済的側面を大いに反映したスーパーグローバル大学採択事業の中に、2012年の答申で提案した「教育の質向上」のための具体策を盛り込むといった手法の中に、文部科学省の当初からの最も重要且つ最終目標である「教育の質向上」を実現させるための戦略を読み取った。当稿では、『「教育の質向上」への集中』は、その先にある教育の目的が経済的観点に偏らない限り、経済的観点と社会的観点のある種融合の形の一つとして評価できるとした。また、ここでは詳述できていないが、国内の高等教育をとり巻く状況とグローバル化への対応という両方の側面を加味した施策であるという点でも有意義であろうと述べている。

2. 教育政策・方針に対峙する上で必要な態度及び視点

コースワーク及び修士論文執筆を通して、「政策」というものは中立あるいは‘value-free’ではありえず、常に何かしらの価値観を反映している、重要なのは影響を受けている価値観の存在を認め、それが何かを自身が理解していることが重要なのだ、ということ学んだ。確

かに、グローバル化をどう捉え、グローバル化のすすむ世界での成功を何と「見なす」かによって、「政策」に列挙する「事実」も変わり、提唱する「施策」も全く異なってくる。今回修士論文のための研究でもとった手法のように、一定の軸を持って政策文書などを読み返すと実に多くの発見があり、無意識的に（時には意識的に、という場合もあるだろうが）あらゆる価値観がそこに反映されていることがわかる。諸機関により示される政策はもちろん、自身が今後提案していく方針や政策についても、そこに通底する考え方は絶対的なものではないと認めた上で、それでもなお自身の信念に基づく教育や教育機関のあり方に近づいていけるような政策を提唱していく必要がある。我々は、とすれば自身の思い描いている道筋が唯一の道である、この状況はこう読み取れると、信じてしまいがちだが、そもそもその理解は数ある解釈の一つに過ぎないかもしれない。そうしたことを常に自覚し、目の前の状況との対話、どういった教育を実現すべきかといった自身への問いかけと継続的な勉強、努力が不可欠であることを痛感した。

V. 総括

まず、「I」で示した本海外研修に臨む上での目的の達成度について検証する。①に関しては、「グローバル人材」についての社会的な関心の高まりもあり、当初は、グローバル化の進む社会で活躍するために学生が身に付けるべき力とはいったい何なのか、自分なりに答えを見つけないという思いを強く持っていた。この点について、研修を終えた今、学生が身に付けるべき力量という観点だけでなく、職員の力量形成という観点からも強く実感していることがある。それは、一年間海外で学び暮らし、多様な人々と協働しながら、自己やこれまで自己を形成してきた要素をあらゆる角度から客観視する経験により得られた、周囲や自身の置かれてきた環境への圧倒的な感謝の念である。そしてこの気づきは、たとえ「グローバルな環境」で将来のキャリアを積もうが積みまいが、周囲の人々と協力して何かを成し遂げる、あるいはもっと単純に、自分の置かれた環境下で幸せに生きるための力へとつながるということを実感したのである。これは、③とも関連して、非常に重要なコンピテンシーの一つだと確信している。つまり、コミュニケーション力やリーダーシップなどといった、個別の力量とは異なる、もっ

と大前提となる人間の素地にかかわる部分の重要性について身をもって学んだのである。

②については、命題そのものに対する解答とは言えないが、既述の通り、当初予想していたように、英国国内学生の多様性からの学びや異文化への関心などへの関心の相対的な低さの実感から、当初の問題意識であった国内学生と留学生との学びあいという課題の普遍性を改めて確認することができた。個々の試みからのヒントは数多く得ることができたが、本文中でも示したように、それらを実質化していくための策や、英国国内学生の参画の度合いという課題への取組みなどについては、調査が至らなかった部分が多々ある。一方、海外研修期間中に本学において、当課題に関連して非常に深まった取組みも複数あり、同時に停滞し再考を迫られている取組みもあることを確認している。今後の活動の益々の高まりに寄与していけるよう、引き続き調査や学びを継続していきたいという決意である。

③のグローバルな見地を有し学生の人材育成に能動的に関わる職員としての力量向上という目的については、今回の経験の全てがその目的に直結するといえる。また、「Ⅳ」にて詳述した正課での学びや気づきが、今後そのまま政策立案に生かされていくことを実感した。具体的には、政策は常に‘value’とは切り離すことができないといった大原則と、グローバルレベルでの意思決定の「地域化」の必要性である。

また、語学運用能力の面については、三つの目的の一つとして位置づけていたわけではなかったが、外部の海外の高等教育従事者より密な議論が可能となるよう向上を目指していた。既述の通り、周囲を英語ネイティブの人々に囲まれた生活というよりは英語を第二外国語として用いる人が圧倒的に多い環境、また多くの時間をリーディング及びライティングに費やすという大学院での学習スタイルにより、スピーキングやリスニング能力の著しい成長を遂げることはできなかったかもしれない。しかし、複数の6,000語のライティングアサインメントや17,000語を超える修士論文を書き上げ、またそのために膨大な量の文献を読んだことは非常に重要なプロセスであったし、一定程度自信に繋がった。そしてそのことにより、英語での情報収集を負担に感じなくなったことは大きな変化であり、今後広い視野をもって業務を遂行していく上でも重要な収穫であった。また、海外の実情に関わる情報や経験、そして友人・教員との日々

のディスカッションや日常的なコミュニケーションの鍛錬により、海外の教育関係者との情報交換などもより密なものとしてでき得ると感じている。

これらの目的に対する到達度の検証を経て、職員の力量形成の方法についての私見を述べるとすると、まず経験に裏打ちされた思いと目的意識を伴った一年間の海外研修は間違いなく有意義だということである。

また海外研修の内容として学位を取得するという選択についても、まず職員としての一定の業務経験を経て、大学運営の視点からのみでなく学生としての視点からも教学内容や仕組みなどを検証するというのは非常に貴重で有用な機会であったと断言できる。しかしそれと同時に、度々述べているように、大学行政の中身を奥深く見るということを考えて、時間の制約や学生というステータスを含めた物理的な難しさは否めない。当初は、数々のイベントやシンポジウムに参加するだけでなく、様々な部署の職員や学生スタッフなどへのインタビューも視野に入れていたが、追いつかなかった。学生としての学びと、職員としてのインターンシップやシャドーイング研修などといったものを組み合わせられると一番よいのかもしれないが、一年未満の正規課程というのはなかなかないため、一年間という枠組みの中であれば焦点を一定絞らざるを得ないのかもしれない。

たとえば、学位取得でない、より実践的な場での海外研修という枠組みからも、間違いなく多くのものを得られるに違いない。しかし、いわゆる「仕事の現場」あるいは「日常業務」という枠組みを超えて、海外での研修に従事するという機会のアドバンテージは、これまでの報告内容をもってここに強調しておきたいと思う。また、もし今後より実践的な場での研修を考案していく際、当然現場での業務に従事するだけでも無数の気づきや新たな力量の形成を通して大きく成長する機会となりえると考えられるが、合わせて、現場の課題でもよいし、経験からくる問題意識に基づいたものでもよいし、事前に何か一つ大きなテーマを持っていくという設計にするとよいのではないかと感じている。

最後に、アドミニストレーター養成プログラム受講中に親身に指導下さった、副センター長江原武一先生、元副センター長・元専任研究員伊藤昇氏、惜しみない協力を下さった職場の皆様、研究及び大学院進学にあたって多大なアドバイス及び推薦状を執筆下さった坂本利子先生、シェフィールド大学大学院において全モジュールを

通じてチューターとして支えて下さった Tim Herrick 先生や修士論文を指導下さった Gareth Parry 先生、海外生活を支えてくれた現地の友人たち、そして本研修の機会を与えて下さった皆様へ、心より感謝の気持ちを表したい。

【参考文献】

- British Council (2013) 日英対話シリーズ「日英における大学改革とイノベーション」第一回【英国における Public Engagement と Research Impact の目指すもの】告知メール
- Dammatsu, S. (2014) Economic and Social Perspectives in Policies for Globalisation in Japanese Higher Education. (Dissertation submitted in part requirement for the MA Globalising Education, Policy and Practice of University of Sheffield)
- Henry, M., Lingard, B., Rizvi F. and Taylor, S. (2001) The OECD, globalisation and education policy. *Oxford: Pergamon for the IAU Press.*
- Hursh, D.W. and Henderson, J. A. (2011) Contesting global neoliberalism and creating alternative futures. *Discourse: Studies in the Cultural Politics of Education*, 32 (2), 171-185.
- Kleinman, D. L., Feinstein, N. W. and Downey, G. (2013) Beyond Commercialization: Science, Higher Education and the Culture of Neoliberalism, *Science & Education*, 22 (10), 2385-2401.
- Olssen, M. and Peters, M. A. (2005) Neoliberalism, higher education and the knowledge economy: from the free market to knowledge capitalism. *Journal of Education Policy*, 20(3), 313-345.
- 田中(2014)「国際化を目指す大学にとってのレピュテーション・マネジメント」*大学時報*、358号、68-71.

【注】

- ・グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について(答申)(2000年、大学審議会)
- ・我が国の高等教育の将来像(答申)(2005年、中央教育審議会)
- ・学士課程教育の構築に向けて(答申)(2008年、中央教育審議会)
- ・新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)(2012年、中央教育審議会)